

NEW FEMINISM REVIEW

「今も昔も、女の老いは恐れられている」

おばあさんの逆襲

エイジズムに挑む

「FEMINISM」のなかの「エイジズム」
私たちが高齢者を理解して差別を減らせます
誰の人生で誰の介護
若い神話——だれが私の老いに責任があるのか

老いとアイデンティティの問い

離脱の技法

「老い」をどうにかいさう孤独
「老い」をどうにかいさう愛情と技術

弱者への変容を生きる

「弱者」をどうにかいさう
「弱者」をどうにかいさう
「弱者」をどうにかいさう——男性オピニオンリーダーに聞く
「弱者」をどうにかいさうの付き合い方

●定価1600円(本体1553円)

ISBN4-313-84044-3 C0336 P1600E ●学陽書房

エイジズム

おばあさんの逆襲



VOL.4
GAKUYO SHOBO

編集 樋口恵子

●編集委員
上野千鶴子
加納実紀代
白藤花夜子
樋口 恵子
水田 宗子

ニュー・フェミニズム・レビュー 4

NEW FEMINISM REVIEW

自立と孤独

● 西川祐子

「つまり、世の老年は子あり孫あり、家庭の中で、老年らしい。生活に生きているのに、私は死ぬまで不安から一歩も抜け出られないのだ。(中略)私は思う。日本の作家は老年に一つの構えを持っている。悟りをひけらかし、それに縋ろうとしている。老年を唯一の財産とでも、信条とでも思っている。西洋の作家と違うところはそこなのだ。同じ孤独でも、日本人の安定感とは違う迷いがあり、不安があり、死まで不安と動揺をひきずって行く。人間の生き方を身のまま追求しているのだ。(中略)私は自分の終わりのない不安、心のたえざるふるえ、動揺もこれも我がものとして受応するほかなく、投げだすわけには参らぬ。さらば、われ、わが生涯を迷いと不安に貫ぬかん、というわけだ。私は日本の作家の老年をとらない——」

(八木秋子「日記」、一九六一年「異境への往還から」——八木秋子著作集第三卷「二七四—二七五頁、JCA出版、一九八一年」)

1 『婦人戦線』のひと

いまはまだ、わたしたちは自立と、自立と背中合せに生じる孤独とを一般論として論じることができないのではないだろうか。自立と、そしてとりわけ孤独は、まだ当然のものとして認められてはいない。

ついこのあいだまで、わたしたちには、祖父母を送り、父母を看取り、自分もやがて子と孫に囲まれた老年を迎えるという、人生の安定したモデルがあった。むしろモデルはモデルにすぎないのであるから、家族サイクルからはずれた生き方は、モデルを生きる人生の数に劣らず多数あった。しかしモデルはある規制力をもつからモデルなのであって、いままでは、家庭からはみだした孤独な老いは多くの場合、不運とみなされ、不幸とうけとめられた。孤独が生じると隠すこと、あるいは性急な穴埋めが考えられた。

だがここ数年、モデルの動揺が自覚されつつある。年末になると新聞に発表される人口動態の数値は、今年をしめくり、来年を占うものとして、次第に大きくとりあげられるようになった。寿命は年々のびている一方、出生数はふえないので、高齢化社会がやってくるといわれる。世帯人員数も減り、世帯のミニ化が目立つが、その原因は子どもの数の減少だけでなく、子どもたちの自立にある。

夫婦と平均二子あるいは一子という核家族モデルが定着しつつあるのだ。そして、核家族と、これに先行した傍系家族や直系家族モデルとのちがいは、核家族の家族サイクルにおいては、単独生活者は例外ではなく、各個人は青春の独身時代と晩年において、むしろ必ずといってよい単独生活期をむかえるところにある。その昔の家制度のイエは個人の生命をこえた永続をめざしていた。し

弱者への
変容を生きる

変容を生きる

かし核家族は寄り添った夫婦一代かぎりで死滅することを前提とし、また構成員がいつでも、それぞれの人生をそれぞれに生きはじめの可能性をより多くふくんでいる。

自立と孤独が一般論として論じられるようになるのはこうして、自分たちの親の世代とは異なった老年をこれから先に迎える、わたしたちの世代からなのである。予感にみちびかれて、わたしたちは自立という、いささか気恥かしいことばをすでにしばしば用いている。自立とは、他人を理解するため、あるいは親しい他者と寄り添って生きるためにも、まずそれぞれが、それぞれでなければならぬということのはずであった。ところが流行語として流布した「自立」の内容はせいぜい経済的独立にとどまっている。経済力が孤独を救済することも期待されている。その場合、自立は追い求められているが、孤独は相変らず隠蔽されようとしているのだ。

だが孤独とはどんなものなのだろう。わたしは、老年も孤独も、いまだ知らない。そこで一般論としてこれを論ずることはやめて、すでに自立と孤独を生きた、あるいは自覚してこれを引受けようとした人たちを、老年という場にたずねてみたいとおもった。

昭和のはじめ、大恐慌のさなかに長谷川時雨の主筆する『女人芸術』の誌上でおこったアナ・ポル論争をきっかけにして、無産者婦人芸術連盟が結成され、アナキズム系の雑誌『婦人戦線』がはじめられた。主宰者は高群逸枝であって、夫の橋本憲三の協力があつた。一九三〇年一月二十六日に持たれた連盟結成のための集まりには、伊福部敬子、神谷静子、城しづか、住井すゑ(子)、高群逸枝、野副ますぐり、野村孝子、平塚らいてう、二神英子、碧静江、松本正枝、望月百合子、八木秋子、鎌田貞子が出席したと記録されている。他に病床にあつた竹内てるよ、途中から加わる犬塚せつ子、白石清子、宮山房子、山本瑛子などの同人がいた。『女人芸術』の同人の他に、下中弥二郎、石川三四郎、渋谷定輔らが起した農民自治会運動の近くにいたことのある人々が参加している。

『婦人戦線』は一九三〇年三月号から、一九三一年六月号までつづき、月刊で五千部、全十六冊が刊行された。一冊ずつ特集形式で、『家庭否定』、『都会否定』、『性の経済』などの特集テーマが表紙に刷りこまれていた。最後の号の編集責任は城しづか改め城夏子に移っている。

『婦人戦線』は性の個性を尊重する立場から、当時はボルシェヴィキと呼ばれたマルクス主義の婦人運動に対立し、生産に対する生命再生産の問題を保持して考えようとする特色を持っている。ここでいう生命再生産の範囲は広く、恋愛について、結婚制度について、産児制限の是非、学校教育批判、あるいは不況を背景とする娘の身売り、売春、幼児虐待、再生産率のゆがみなどを社会問題としてとりあげた。同人たちは小論文や評論の他に自伝的要素の強い小説や詩を数多く書いている。不況と生活苦の時代であるだけよいに、いかに生きるべきかが、切実な問題として問われたのだった。

平塚らいてうは高群逸枝を後援し、第二『青鞥』と呼んで『婦人戦線』に加わった。しかしかつての『青鞥』がまず娘集団としてはじまったのとは違って、『婦人戦線』の人びとはアナキズム運動の近くにいた異性を恋愛や結婚の相手に選び、すでに子どもを抱えている同人もいた。家父長制家族やブルジョア家庭を否定して同志的結合を目指している。また彼女たちの大部分は地方農村出身で、女学校を出た後、東京でタイピスト、秘書、保険外交員、女給、カフェーのマダム、新聞記者、文筆業などさまざまな仕事についた都会居住一代目の若い職業婦人であった。月に一度、荻窪にあつた高群逸枝と橋本憲三の家でもたれた編集会議は活気と親しみのある集まりであつたという。

しかし、一年半つづいた『婦人戦線』が終った直後から、満州事変にはじまるいわゆる十五年戦争があつたり、このあいだ同人たちはそれぞれ異なる生き方をえらんで困難な時代を生き、各地に

散らばったままで互いの消息も知らなかった。主宰者であった高群逸枝は世田谷に森の家あるいは女性史研究所と呼ぶ住まいを建てて移り、面会謝絶の札を出して婚姻と家族の歴史の研究に没頭した。彼女の在野の孤独な研究とその意味についてはすでに度々論じたので〔森の家の巫女・高群逸枝〕新潮社、一九八三年。「戦争への傾斜と娼賤の婦人たち」講座「女性史」第五巻、東大出版会、一九八三年。「二つの系譜——平塚らいてう、高群逸枝、石牟礼道子」『母性を問う』下巻、人文書院、一九八五年。ここでは触れない。「婦人戦線」の人びとは、はるか戦後、高群逸枝の死後に再会し、「埋もれた女性アナキスト、高群逸枝と『婦人戦線』の人々」(一九七六年)と題する手づくりの回想録を出した。その後、「婦人戦線」全十六冊の復刻版(緑蔭書房、一九八三年)が出版されている。

自立と孤独というテーマについてたずねる人生の先輩としては、『婦人戦線』の人たちが最もふさわしい、とわたしは考えた。この人たちは五十年前にすでに、自由と連合というテーマを考えている。孤独と連合とは、一見したところまるで反対のものとみえるが、『婦人戦線』の人びとは当時も、それぞれがそれぞれのままで集まることを目指していたのであり、決して一枚岩の集団ではなかった。その後も互いに独立を保って生きている。わたしは一九七〇年代のはじめに図書館で『婦人戦線』のバックナンバーとめぐりあった。当時のリブの女たちが自覚しはじめていた個として、女として、他者と共にどう生きるかという問題をすでに戦前に考えていた人たちがいたことに驚き、それぞれの文章にひきつけられて読んだ。以後十年間、『婦人戦線』の人々は文通と対話を通して遅れてきた読者になお多くのかたちを語った。

2 八木秋子

『女人芸術』から同人の一部が分裂して『婦人戦線』をつくるきっかけとなったアナ・ポール論争
『女人芸術』から同人の一部が分裂して『婦人戦線』をつくるきっかけとなったアナ・ポール論争
は八木秋子が『女人芸術』誌に書いた藤森成吉あての公開状からはじまった。「八木秋子著作集」(全三巻、JCA出版、一九七八、一九八一年)の年譜によると、八木秋子は一八九五年長野県に生まれ、一九二一年、一児を置いて婚家を出たのち、雑誌社、新聞社で働き、『女人芸術』の他に『黒色戦線』に評論と創作を発表していた。

『婦人戦線』では八木秋子は「調査欄」を担当して紡績業女子工員の労働の現状を示す統計資料を紹介したり「社会時評」を書いている。一九三〇年には日本全土をおおっていた不景気の対策として、工場の人員削減、操業短縮あるいは閉鎖が続き、女子労働者は解雇されて村に帰るが、食うことが出来ず、再び都会をさまよった。この暗い現状をふまえて、日米資本主義はやがて中国大陸において正面衝突するだろうという長期予想を立てた。

『婦人戦線』の他の同人とくらべると、八木秋子にはいわゆる婦人問題、性別問題を扱った文章が無くて、もっぱら政治や社会問題について書く特徴がある。中篇小説「ウクライナ・コムミュン」はマフノの農民運動に取材した。「婦人戦線」に三号まで協力した後は雑誌を離れ、信州各地に農村自治コンミュンを作ろうとする農村青年社を起した。後に『婦人戦線』を離れたのは実践運動と思想運動の党派的な対立と、坐って書いてはられない自分自身のいたたまれない気持のせいであったと語っている。

その後一九三二年、農村青年社は資金に困って窃盗事件をおこし、八木秋子も贓物牙保罪で逮捕されるが、執行猶予がついて出所した。一九三五年、同事件は蒸しかえされ、今度は治安維持法違反に問われ、懲役二年六カ月の判決を受けた。法廷で八木秋子と結婚して更生すると誓った同志をしりぞけて服役、出所後に満州へ渡った。かつて『婦人戦線』誌上でした長期予想のとおりにはじまった日中戦争そして太平洋戦争のあいだ満鉄新京支社留守宅相談所で働き、夫が遠隔地へ行って

残された母子家庭の世話をした。戦後、満州から引揚げて後に日本で成人した息子と再会、しばらくして彼の死に立会うという事件を経たのち、母子寮・澄水園の寮母となって、やはり母子家庭の世話をつづけている。

冒頭に引用した日記の日付は一九六一年一月一〇日であって、この時、八木秋子は六十五歳、澄水園では嘱託の寮母であった。いったん希望退職して独自の社会事業を起こそうとして失敗、再就職であったため、身分は不安定で将来の保証もなかった。日記によると前年には、安保闘争の街頭デモに参加、ある彫刻家にたいする一方的な恋愛感情など、いつときの精神の高揚があった。それが去つたのち、ここではじめて老年の孤独の予感がはじまった。日記には老年は家庭にかくまわれてあるべきであるという常識からはみだして無防備の裸だという白覚と日本的な晩年の悟りの境地にたいする積極的な反逆の心が書きつけられている。

母子寮・澄水園は戦後時代の終りを告げるかのように翌六二年に閉鎖された。八木秋子は閉鎖前から新聞の求人欄に新しい職をさがすのだが、年齢が障害となった。「文案談筆編集校正婦健年60身確誠実」という自分で新聞に出した二行の求職広告も残っていて胸をうたれる。しばらく郷里に帰って姉妹の家族と共に住むが一九六八年に再び上京し、生活保護をうけて四畳半一間のアパートで独り暮らしをつづけた。

一九七六年に『婦人戦線』の同人たちが集まって小冊子を編んだとき、八木秋子は「明るい肯定の人・高群逸枝」と題した回想記に「わたしは高群逸枝のみずからを表現する『孤独』という言葉を感じない」と書いた。孤独のなかにしか住めないという人が夫婦共用日記を持って満ち足りているはずがない、日記は自分自身しかふみこめない世界を表現するものだと八木秋子は言う。夫婦のまれにみる信頼によって仕事の場をつくり女性史の大作を書き上げて死んだ高群逸枝にたいして、

八木秋子は孤独だけはあなたのものではない、それは何一つ持たないで独りで生きたものに残された唯一の持ち物なのだから、と抗議するのである。

この年の暮、八木秋子は八十一歳で都立養育院に入った。しかし、一部屋に数人が同居する寮生活に耐えられず、いく度か脱出を試みている。あくまでも束縛を嫌う自由な魂にうたれて手を貸さうとするが現実にはみつからなかった自由な空間を、通信編集という形で提供した一人の青年とその友人たちによって「八木秋子個人通信あるはなく」（編集人・相京範昭）がタイプ印刷で発行されはじめた。五年のあいだに通信十七号と三冊の著作集が出版された。「八木秋子著作集」は編集人が図書館の古い新聞雑誌の記事や古い原稿を丹念に読みおこして編んだものである。

通信の送り先は最初、三十部であった。著作集は一千部の発行であった。出版界の常識からすればごく少数だが、八木秋子の文章は悩む心や病む人を強く引きつけ口コミで読者の輪がひろがった。「あるはなく」の編集人は辛うじて間にあったことが未だに不思議だと語るのであるが、著作集の完成を待ちかねるようにして、八木秋子は骨折、脳梗塞などで入院、記憶も急速に失われた。最後の一年間は親族のひとり、夫を失ったばかりの女性に共感をこめた迎え方をされおだやかな日々であった。一九八三年四月三〇日逝去、享年八十七歳。葬儀は八木秋子に若いときから影響を与えたキリスト教の教会で行われた。

八木秋子は晩年の個人通信においてはじめて、子どもを置いてした家出について語り、そこから一気にことばがあふれ出た。家出の後には家庭らしきものを作らず、通信の編集人に、わたしには母性愛が無いのよ、と逆説的に語りかけたり、親しい友人に、人間は何故に夫であり妻であるか、親であり子であるか、また家庭という型の中に生きねばならぬかと改めて問うてあきらめられたこともある。読者と会うときも相手に家族があると知ると、ある種の遠慮を示した。

だが八木秋子は満州時代も戦後も、よりによって母子家庭の世話を仕事にえらび、長く続けた。いわば欠損家庭の人びとと、心がまっすぐに通じる楽しい日々であったと語っている。だが母子寮の人たちも次々と自分の家を建てて寮を出て行き、八木秋子は残された。寮母時代には「マリア先生」と呼ばれていた。

通信の読者の一人として、わたしは何度か養育院の八木秋子に会った。或る日、面会室のソファに向きあって話していると、他に見知らぬ老婆が二人いつのまにかやって来てわたしの両脇に坐った。しだいににじりよって密着し、「それで『宗派は』と話の中に割りこむ。養育院には宗教団体からわたしの年齢の中年の女がよく来るのだろう。どうかかまわないうで、と言うかのようにわたしに向かつて首を振ったときの八木秋子の暗きまなざしが忘れられない。

老いた孤独な集団の中において八木秋子はきわだつて明晰であった。通信の読者にたいしては「わたしの文章には飛躍があるでしょう」と言い、ことばが通じることをどこまでも疑い、そのもどかしさに身をよじっていた。人との関係を切つては再出発をくりかえした八木秋子はたびたび沈黙した。晩年の個人通信がようやく、彼女の切れ切れのことばは、自分自身となつた後の人と人とのつながりを探す声であったことを明らかにした。ことばに表われた孤独の深さが、世代をこえて読者をひきつけたのである。

『老いを生きる場』

今から十数年前のこと、わたしは図書館で見つけた『婦人戦線』誌に熱中し、欠けている号の複写を『婦人公論』編集部の関陽子氏に借りて読んで、論文「高群逸枝と『婦人戦線』」(思想一九七五年三月号)を書いた。すると関氏から、論文の感想と『婦人戦線』の同人の現在所を教える手紙をいた

だいた。正直に言つて、虚をつかれた気持がした。わたしは自分では現代的な問題を考えたつもりであったのに、実は昭和のはじめの『婦人戦線』を歴史として読んでおり、同人たちが今、自分と同時代の空気を吸って生きていることを忘れていたのだつた。各住所へ論文抜刷を送ると、全員からただちに、的確な評をそえた返信があつた。文通がはじまり、年に数度、東京へ行き、『婦人戦線』の人びとを訪ねることがつづいた。

やがてわたしは今用語でなく日常のことばで話し、市井の生活の中で強烈な個性をひそやかに輝かして埋れている『婦人戦線』の人びとのその後と現在により多くの魅力を感じるようになった。もつとも訪ねても多くを話すではなく、ただ一緒に坐っている時間の方が長かつた。こたつのきまつた席、ソファのくぼみがなつかしいものとなり、時どきは自分も長く生きた人の目で世の中を見ることがあつた。

『婦人戦線』のまわりに集まっていた人びとの現在の生活は独居、夫婦二人暮らし、子どもとの同居、各種老人ホームにおける集団生活、あるいは、ただ今模索中である。同世代の人たちとくらべると、まず、選択が多様であること、その多様な選択の中にあつてもよさそうな孫と子に囲まれた安定した三世代同居が無いことに気づく。グループとしてのこの特徴はおそらく偶然ではないであらう。

『婦人戦線』の人びとは大正時代に女学校教育をうけて故郷を出ており、その時点ですでに家制度と切れた例外的な人たちである。『婦人戦線』当時、あるいはその後も、思想上の同志を配偶者にえらぶことが多く、形の上では今の核家族に似た夫婦家族をつくつた。彼女たちが今、老母として家族の中におさまることが少ない原因は家制度との断絶、自分自身の人生をもつたことにある。三世代同居モデルからはずれたとき、モデル以外の生き方は一通りでなくさまざまであるのはむしろ。

当然とおもわれる。「婦人戦線」の人びとはそれぞれの生き方の延長としてさまざまな形の老年を選んだ。この多様な選択にさらに友人同居や選りなした三世代同居などいくつかの選択肢をつけ加えたものが今後、一般的になるだろう。

だが違いもまた予想される。「婦人戦線」の人びとは「婦人戦線」の後の人生においても志ゆえにたびたび世の少数派となり、そのつど自分のする選択を自覚して引受けている。老年の生活は度重なる選択の結果であり、選ばれながら選びとつたという意識がはつきりしている。だからどんな不如意の中にも自分の城をもち、それが現実が無い場合には文学空間とでも呼ぶべき世界を別に築いている。個人が家族の外にむき出しになり、老後の生活の選択をせまられることの方が一般的になったとき、個々の人間は果してこれほどの自覚をもつだろうか。選択肢がいくらふえても、過去の収入高によって輪切りされ、ふり分けられるだけなら真の選択とはいえない。「婦人戦線」の人びとはどこまでも自分流の老年を自分で選ぼうとしており、わたしには、選択の結果よりも、選びとるまでに迷いや苦闘があったことを知ることが大切であった。

「婦人戦線」の人びとのそれぞれの人生は、自立とはひとりになることなのではなく、親しい他人や、最後まで向きあわなければならぬ世の中との関係をつくってゆくことだと教える。社会性なくして自立はあり得ない。

もう一つのテーマ、孤独についての感じ方、語り方は一人一人じつに違っていた。「婦人戦線」時代の文体の違いとおもいあわせて、聞き手であるわたしにはことさらに感銘が深く、老年は若い時代にまして個性的である、と改めておもった。孤独感とは社会を意識した人間の、社会化されない内奥の部分が外とすれあう痛みの感覚であろう。わたしはインタビューのあいだに、孤独感のあるなし、また孤独を感じる感じ方のちがいは、近代的個人主義をどう通過したかにかかわっていると感

じた。孤独は近代の病いであって、病気は病人と社会を苦しめるのだが、血縁家族意識にもとづく日本的共同体からぬけ出すためには、一度は孤独という近代の病いを深刻に病む必要があるのではなからうか。わたしはそれぞれの孤独を語ることに強ひきつけられた。

自立と孤独についてたずねるうち、疑問が残った。自立した人たちは、かくしゃくたる老年の次に来る不自由な老年についても、若い世代を当てにはせず、呼びかけられないかぎり後は後を向かないつもりと見えた。では追いかけて訪ねるのは、こちらのすることなのだ。関係が切れてしまえば、老いた人の沈黙の中に貯えられている豊かなことばは気づかれずに終る。無残な老いや、嫌悪の対象となるような老いの中にさえ、きらめくことばが埋れているのに。

現在の各種老人ホームは人家を離れ、あまりに別世界である。老いた人間が一カ所に集められ、隔離されることが社会問題の解決とは思えなかった。来るべき死をみつめ、生きてきた生の意味を問うことをひきうけている人たちがいるから、若者たちは日々、死と生の無意味という考えに追われる恐怖をまぬがれている。老いた人たちの個々の姿、とくに孤老の姿が目に入らなくなったとき、恐怖はどんなにか猛威をふるうだろう。わたしは身近かに老いた人たちを見たいし、自分もまた自分流に老いる場所を、町の中に、どこまでも探したい。

*本稿は「老いの発見」⁴「老いを生きる場」(岩波書店、一九八七年)に、「自立と孤独——雑誌『婦人戦線』の人びとを訪ねて」として初出。そのうち本書には、紙面の都合により八木秋子を中心とした三章分を収録した。「2 八木秋子」に続く五章分を割愛している。